東京外国語大学論集 40 (別刷)

日・中両語の結果を表わす複合動詞

望 月 圭 子

1990

東京外国語大学論集第 40 号(1990)

日・中両語の結果を表わす複合動詞

望　月　圭　子

0　結果を表わす複合動詞

日本語にも中国語にも，結果を表わす複合動詞が存在する．日本語では，〈歩き疲れる，叩き壊す，……〉，中国語では「走累，打坏，……」(以下，〈　〉，「　」はそれぞれ日本語，中国語であることを示す）などがその例として挙げられる．これらの複合動詞は，前項動詞が原因となる動作を表わし，後項動詞が動作の結果を表わすという意味構造をもつという点では，日本語も中国語も同じである．ところが，結果を表わす後項動詞が自動詞か他動詞かという点で顕著な相違がみられる．次の例を見てみよう．

(1)　张三　打　　坏　了

〈張三〉〈叩く〉〈壊れる〉Asp.

玩　艺　儿.

〈おもちゃ〉

(2)　張三はおもちゃを叩き壊した．

(1)の複合動詞「打坏」は‘動作＋結果’という意味構造をなしており，「打」は他動詞，「坏」は自動詞である．従って，(1)を原文に忠実に日本語に訳せば，(3)のようになるが，これは非適格文となる．

(3)　＊張三はおもちゃを叩き壊れた．

この事実から，次のような推測がなされる．つまり，〈叩き壊す〉という同じ事実を表わすのに日本語・中国語の間には次のような相違がみられる．

日本語：動作・行為を表わす他動詞＋結果を表わす他動詞

中国語：動作・行為を表わす他動詞＋結果を表わす自動詞

つまり，中国語では同じ結果を表わすのにストレートに自動詞を用いているのに対して，日本語では間接的に‘結果’を含意する他動詞を用いている．ここで言う‘結果’を含意する他動詞とは，例えば〈殺す〉という他動詞は自動詞〈死ぬ〉という意味を含意しており，前出の他動詞〈壊す〉は自動詞〈壊れる〉の意味を含んでいるという意味で使っている．

本稿は，日本語と中国語の結果を表わす複合動詞について，自動詞・他動詞，能格動詞という観点から，比較・分析し，さらにGB理論の枠組みにおける θ-役割，格付与に関する理論にどのような問題点が生じるのか，その解決法は何かについて考察するものである．

1　有対自・他動詞

早津（1989）は，他動詞を有対他動詞と無対他動詞とに分けている．有対他動詞とは，〈倒れる―倒す〉，〈曲がる―曲げる〉のような，対応する自動詞をもつ他動詞であり，無対他動詞とは，〈叩く〉，〈読む〉のように，対応する自動詞をもたない他動詞のことである．早津は有対他動詞を動作によって生じる対象の変化を含意するもの，無対他動詞を動作の過程の様態に注目するものとして分析している．

日本語には有対自・他動詞がかなり多く，さらに例をあげると以下のようになる．（井上（1976）より，（　）は二重子音になることを避けるために省略される音素を示す）

自動詞：her-(r)u（減る）
他動詞：her-as-(r)u（減らす）

自動詞：ak-(r)u（開く）
他動詞：ak-e-ru（開ける）

自動詞：ag-ar-(r)u（上がる）
他動詞：ag-e-ru（上げる）

自動詞：tor-e-ru（取れる）
他動詞：tor-(r)u（取る）

これに対し，中国語では，有対自動詞・他動詞の組が極端に少ない．というのも，自動詞・他動詞の区別が日本語のようにはっきりとせず，同一の形態で自動詞としても他動詞としても機能する‘能格動詞’（両用動詞とも呼ばれる）が多いからである．この能格動詞についてはあとに詳しく述べることにする．さて，次に挙げるのは極めて稀であるが，自・他動詞の区別が音声上の相違によって表わされる，中国語の有対自・他動詞の対である．（表音方式は，中国語の共通語のローマ字表音形式による）

(4)　「转」zhuàn：自動詞　〈回る〉
　　zhuǎn：他動詞　〈回す〉
(5)　「折」shé　：自動詞　〈折れる〉
　　zhé　：他動詞　〈折る〉
(6)　「倒」dǎo　：自動詞　〈倒れる〉
　　dào　：他動詞　〈倒す〉

2　能格動詞

1でみたように中国語では有対自・他動詞が非常に稀で，能格動詞が非常に多いという特徴がある．一方，日本語では，有対自・他動詞が多く，能格動詞が少ない．日本語の能格動詞の対をあげるならば，次のようになる．

〈開(ひら)く〉

・太郎が戸を開く．

・戸が開く．

〈閉じる〉

・太郎が戸を閉じた．

・戸が閉じた．

〈増す〉

・妻が交際費を増す．

・交際費が増す．

これらの例からわかるように，能格動詞は，それが他動詞として働く文の目的語が，自動詞として働く文の主語と等しくなる．次は，中国語の能格動詞の例である．

「开」〈開く，開ける〉

・张三　开　了　门.

〈張三〉〈開ける〉Asp.〈戸〉

〈張三が戸を開けた〉

・门　开　了.

〈戸〉〈開く〉Asp.

〈戸が開いた〉

「关」〈閉める，閉じる〉

・张三　关　了　门.

〈張三〉〈閉める〉Asp.〈戸〉

〈張三が戸を閉めた〉

・门　关　了.

〈戸〉〈閉じる〉Asp.

〈戸が閉じた〉

「增加」〈増す，増える〉

・妻子　增　加　了　交际費.

〈妻〉〈増やす〉Asp.〈交際費〉

〈妻が交際費を増やした〉

・交际费　　增加　　了.

〈交際費〉〈増える〉Asp.

〈交際費が増えた〉

「改」〈変える，変わる〉

・张三　　改　　了　　时间.

〈張三〉〈変える〉Asp.〈時間〉

〈張三は時間を変えた〉

・时间　　改　　了.

〈時間〉〈変わる〉Asp.

〈時間が変わった〉

「生」〈生む，生まれる〉

・她　　生　　了　　孩子.

〈彼女〉〈生む〉Asp.〈子ども〉

〈彼女は子どもを生んだ〉

・孩　子　　生　　了.

〈子ども〉〈生まれる〉Asp.

〈子どもが生まれた〉

能格動詞を考えるに当たって，注意すべき点は，日本語には主語と目的語に格標識，即ち格助詞がつくが，中国語では，主語と目的語に格標識がつかないという事実である．従って，日本語の場合は自動詞文の主語と他動詞文の目的語とが同じであるといっても，それぞれについている格助詞は〈が〉と〈を〉で，違っているのである．これに対して，中国語では格標識の問題は起こらず，日本語よりも能格言語に近いと言えるかもしれない（言語学者の報告によれば，能格言語では，自動詞文の主語と他動詞文の目的語に格標識がつかないことが多いそうである）．

ところで，本稿で問題にしている‘結果を表わす複合動詞’にも能格動詞が多い．例えば，「打敗」〈打ち負かす，負ける〉が挙げられる．

(7) 上　海　队　　打　　敗

〈上海チーム〉　〈戦う〉　〈負ける〉

了　　北　京　队　.

Asp.　〈北京チーム〉

〈上海チームは北京チームを負かした〉

(8) 北　京　队　　打　　败

〈北京チーム〉　〈戦う〉〈負ける〉

了.

Asp.

〈北京チームは負けた〉

上の二つの文において，敗者となるのはいずれも〈北京チーム〉であるから，「打敗」は能格動詞である．ちなみに，「打敗」の反義語と考えられる「打胜」〈戦って勝つ〉は，能格動詞ではなくて，‘対格動詞’である．次の例文を見てみよう．

(9) 上　海　队　　打　　胜　　了

〈上海チーム〉　〈戦う〉　〈勝つ〉Asp.

北　京　队.

〈北京チーム〉

〈上海チームが北京チームに勝った〉

(10) 北　京　队　　打　　胜　　了.

〈北京チーム〉〈戦う〉〈勝つ〉Asp.

〈北京チームは勝った〉

この二つの文で勝者は，他動詞文では主語「上海チーム」で，自動詞文では主語「北京チーム」で互いに違っている．日本語の〈勝つ〉も「打胜」と同様である．

(11) 上海チームが北京チームに勝った.

(12) 北京チームが勝った.

他動詞「打敗」に対応する日本語は〈負かす〉，自動詞「打敗」に対応する日本語は〈負ける〉であるのに，他動詞「打胜」に対応する日本語も自動詞「打胜」に対応する日本語もどちらも同じ〈勝つ〉であるのは，(9)における他動詞「打胜」が，他動性の極めて低い他動詞であることを暗示しているようである．「打胜」は被動文にも，‘「把」字句’（「把」〈を〉という前置詞を使った文）にも使えないという事実も他動性の低さを支持しているようである．次の例文は(13)が被動文，(14)が「把」字句である．

(13)＊北　京　队　　被　　上　海　队

〈北京チーム〉〈られる〉〈上海チーム〉

打　　胜　　了.

〈戦う〉〈勝つ〉Asp.

〈？北京チームは上海チームに勝たれた〉

(14)＊上　海　队　把　　北　京　队

〈上海チーム〉〈を〉〈北京チーム〉

打　　胜　　了.

〈戦う〉　〈勝つ〉　Asp.

〈＊上海チームは北京チームを勝った〉

能格動詞としての中国語の複合動詞の例を更に挙げておく.（例文は黄（1988）による）

(15)　他　　气　　死　　我

〈彼〉〈腹をたたせる〉〈死ぬ〉　〈私〉

了.

Asp.

〈彼は私を死ぬほど腹をたたせた. ⇨彼に死ぬほど腹がたった〉

(16)　我　　气　　死　　了.

〈私〉〈腹がたつ〉〈死ぬ〉Asp.

〈私は死ぬほど腹がたった〉

(17)　那　　顿　　饭　　吃

〈あの〉助数詞〈食事〉〈食べる〉

坏　　了　　我　　的　　肚　子.

〈壊れる〉　Asp.〈私〉　〈の〉〈おなか〉

〈あの食事は私のおなかを壊した. ⇨あの食事で私はおなかを壊した〉

(18)　我　　的　　肚　子　　吃

〈私〉　〈の〉〈おなか〉〈食べる〉

坏　　了.

〈壊れる〉Asp.

〈私のおなかは食当たりした〉

最後に，日本語が中国語から漢字を借用しているために混同し易い能格動詞の例を一つ挙げておこう.〈解放する〉という動詞は日本語では他動詞にしか用いられないが，中国語では，「解放」は能格動詞である. 次の(19)は他動詞として使われる例，(20)は自動詞として使われる例である.

(19)　共産党　　解

〈共産党〉〈束縛を無くす〉

放　　了　　中　国　人　民.

〈自由である〉Asp.〈中国〉〈人民〉

〈共産党は中国人民を解放した〉

(20) 中国　人　民　　解

〈中国〉〈人民〉〈束縛を無くす〉

放　　了

〈自由である〉Asp.

〈中国人民は束縛を無くして自由になった〉

(20)は普通(21)のように日本語に訳されるが，これは誤訳といえよう．

(21) 中国人民は解放された．

つまり，(21)は被動文として訳されているのだが，これでは「中国人民」の意志性が無視されてしまう．このような日本語と中国語の食い違いは他にも多くあるはずだが，今後の調査に委ねたい．

4 後項動詞

石井（1983）の統計によれば，日本語の2550の複合動詞のうち，《無対他動詞》＋《有対他動詞》の組み合わせは，全体の約32％を占め，最も多い組み合わせだという．また，早津（1989）は，無対他動詞を'動作の過程の様態に注目するもの'，有対他動詞を'動作によって生じる対象の変化を含意するもの'として分析している．彼女は，この分析を支持する現象として，複合動詞の前項動詞に無対他動詞が，後項動詞に有対他動詞がくる組み合せが最も多い事実を挙げている．では，何故後項に，やはり意味的に対象の変化を表わすことのできる自動詞ではなく，他動詞がくる組み合せのほうが多いのだろうか．具体的にいうならば，何故，(22)で，〈殴り倒した〉が用いられて〈殴り倒れた〉が非適格なのか．

(22) 張三は李四を殴り｛倒した／＊倒れた｝．

これは，統語的制約によるものと思われる．まず，日本語の複合動詞は，前項動詞が連用形で，後項動詞が終止形になっている．これは，少なくとも語構成上は，前項が修飾語で，後項が中心語であることを示している．従って，名詞句にどのような格助詞を与えるかを決定するのも後項動詞によるものと推測される．(22)では，目的格に与えられている〈を〉は，自動詞〈倒れる〉が与えることができないものなのである．後項動詞が名詞句への格助詞を決定するという推測は，次の例からも検証される．

(23) a．太郎は原稿を書き上げた．

　　b．太郎は原稿が書き上がった．

(24) a．指定席を全部売り切った．

b．指定席が全部売り切れた．

(25) a．荷物を鞄に押し詰める．

b．荷物が鞄に押し詰まる．

(23)—(25)では，いずれも例文aが後項に有対他動詞，例文bが有対自動詞がきている．そして，前項動詞の対象には，後項動詞が他動詞の場合は，〈を〉，自動詞の場合は〈が〉という格助詞が与えられている．こうした対応は，後項動詞が格助詞を決定することを暗示するものである．注[1)]

一方，中国語について考えると，後項動詞は常に形容詞をも含む自動詞であることが推測される．この推測は，1．で挙げた自・他動詞の区別が音声上の相違によって表わされる動詞の対（「dǎo-dǎ」「zhuàn-zhuǎn」「shé-zhè」）を後項動詞に用いた複合動詞を考えることによって検証される．次の例文を見てみよう．

(26) 张　三　打　倒　了

〈張三〉〈殴る〉〈倒れる〉Asp.

李　四．

〈李四〉

〈張三は李四を殴り倒した〉

(27) 哪怕　是　一　点　儿

〈たとえ〉〈である〉〈少しの〉

微　风，　也　能　把

〈微　風〉〈も〉〈できる〉〈を〉

风　标　吹　转　了．

〈風向計〉〈吹く〉〈回る〉Asp.

〈たとえ少しの微風でも，風向計を吹いて回すことができる〉

(28) 这　种　表　带

〈この〉〈種〉〈腕時計〉〈バンド〉

不　结　实，　我　一　年

〈ない〉〈丈夫だ〉〈私〉〈一年〉

戴　折　了　两根　了．

〈着ける〉〈折れる〉Asp.〈二本〉Fip.

〈この種の腕時計のバンドは丈夫じゃない，私は一年で二本も使い折ってしまった〉(Fip.は‘文末語気助詞’)

(26)の「倒」は「dǎo」，(27)の「转」は「zhuàn」，(28)の「折」は「shé」とそれぞれ発音されるの

で，いずれも自動詞であることが明らかである．これら三つの自動詞に対応する他動詞「dào」，「zhuǎn」，「zhé」にそれぞれ後項に用いた結果を表わす複合動詞の例は『汉语动词—结构补语搭配词典』注[2)]には載っておらず，自動詞の場合のみ，例文が挙がっていた．

以上のような事実より，“後項動詞は自動詞である”という仮説は妥当なものではないかと推測される．

さて，日本語の複合動詞の場合を思い返してみると，後項要素が中心語で，名詞句に付与する格助詞を決定する機能を持ち，前項要素は連用修飾語的な役割を果たしているのであった．後項要素による格助詞の決定という事実が《他動詞》+《有対他動詞》の組み合わせの複合動詞が多い理由と考えられる．これに対し，中国語では，格標識が主語と目的語にはつかず，両者に語順によって識別される．こうした中国語の特質が，複合動詞の後項要素の位置に目的格を付与しない自動詞を常に許す理由ではないかと考えられる．

5　意味構造

名詞は述語と結び付いて一定の意味的な役割を果たし，その役割は述語の種類によって決まる．例えば，‘動作主’(Agent)，‘被動者’(Patient)，‘対象’(Object)，‘場所’(Location)，‘目標’(Goal)，‘起点’(Sourse) 等の役割を指すわけだが，これらはGB理論では，θ-役割と呼ばれ，また意味格，基底格或いは深層格とも呼ばれてきたものである．以下，複合動詞が名詞句とどのような意味関係をもつかについて考察し，GB理論のθ-理論の枠組みでどのように説明されるのかを考えていこう．まず，次の例文をみよう．

(29)　我　走　累　了．
〈私〉〈歩く〉〈疲れる〉 Asp.
〈私は歩き疲れた〉

(30)　他　喝　醉　了　酒．
〈彼〉〈飲む〉〈酔う〉Asp. 〈酒〉
〈彼は酒を飲んで酔った〉

(31)　张三　打　倒　了
〈張三〉〈殴る〉〈倒れる〉 Asp.
李四．
〈李四〉
〈張三は李四を殴り倒した〉

(32)　我　写　错　了
〈私〉〈書く〉〈間違っている〉 Asp.

这　个　字.

〈こ　の〉〈字〉

〈私はこの字を書き間違えた〉

(33) 我　吃　坏　了

〈私〉〈食べる〉〈壊れる〉Asp.

肚　子.

〈おなか〉

〈私は（何か悪いものを）食べておなかを壊した〉

(29)—(33)の各例文とそれに対応する日本語訳とを比べてまずわかることは，中国語の結果を表わす複合動詞は日本語の複合動詞がカバーできる意味構造よりもさらに多様な意味構造をも表わしうるという点である．例えば，(30)の「喝醉」や，(31)の「吃坏」は，日本語の複合動詞で表わしきれない構造である．では，次に(29)—(33)をそれぞれ順に検討してみよう．まず，(29)では，自・自の組み合わせで，前項動詞「走」〈歩く〉の動作主は「我」，後項動詞「累」〈疲れる〉の経験者格も「我」である．次に(30)では，他・自の組み合わせで，前項の他動詞「喝」〈飲む〉という動作の動作主は「他」で，対象は「酒」で，後項の自動詞「醉」の経験者は「他」である．(31)では，他・自の組み合わせで，前項の他動詞「打」〈殴る〉の動作主は「张三」で，被動者は「李四」である．後項動詞「倒」〈倒れる〉の動作主は「李四」である．(32)は，他・自の組み合わせで，前項の他動詞「写」〈書く〉の動作主は「我」で，対象は「这个字」である．(33)は，(32)と同じく他・自の組み合わせであるが，前項の他動詞「吃」の動作主は「我」で，対象は省略されている．後項の自動詞「坏」の対象は「肚子」である．このように，前項動詞と後項動詞とが独立して別々に θ-役割を与えるとするならば，GB 理論の枠組のなかでは，θ-規準に反することになってしまう．θ-基準とは，

θ-基準（θ-criterion）：

一つの項は θ-役割を一つだけ持ち，また一つの θ-役割は必ず一つの項にだけ付与されなくてはならない．

というものであり，一つの名詞句が二つの θ-役割を持つことを禁止している．

ここで考えられる解決策としては複合動詞を一つの複合語とみて前項と後項の動詞が名詞句とどのような意味関係をもつかが語彙項目中の記載事項として決まっていると考えることである．つまり，‘論理形式’（Logical Form）の段階で，二つの動詞の θ-役割が別々に解釈されるのではなく，D-構造（D-structure）に語彙が挿入される際にすでに二つの動詞が一つの複合された動詞としてレキシコン（Lexicon）より挿入されると考えるのである．

しかし，この解決法では，中国語では非常に頻繁に使われる複合動詞文の意味解釈を体系的

に捉えられない．複雑な意味構造をもち得る中国語の複合動詞文の意味解釈は，前項動詞と後項動詞がそれぞれ，名詞句とどのような意味関係にあるかを明らかにしてはじめて可能なのである．複合動詞文の意味解釈をレキシコンに記載されている個々の複合動詞の特質にのみ頼って行うというのは，言語習得の面から考えても現実味がない．こうした中国語の‘有標’(marked)ともいえる現象を普遍文法の中に組み込むためには，新しいパラメーターの設定が必要かもしれない．また，個人的な談話によれば，湯廷池氏は，‘この分野の研究については中国語の$\overline{X}$理論と合わせてさらに研究を進めなければならない．’と述べている．

日本語の θ-付与についても，同一の名詞句に二つのの θ-役割が与えられるので，θ-基準に違反することは，中国語と同様で，その解決法も中国語の場合と同じはずであり，今後の研究課題である．

6　格付与

中国語において，複合動詞の後項が自動詞であるという仮説が正しいとするならば，自動詞には目的格を付与する機能がないから，前項の他動詞が目的格を付与するのではないかということが推測される．しかし，この推測は次の四つの理由により妥当性を欠く．

まず第一の理由は，中国語においては次にみられるように自・自の組み合わせが複合されて他動詞の如く目的格を与えることができる例がある．

(34)　我　喊　哑　嗓子　了．

〈私〉〈叫ぶ〉〈かれる〉〈喉〉Asp.

〈私はどなりすぎて声がかれた〉

(35)　胖　子　坐　塌

〈ふとっちょ〉〈座る〉〈つぶれる〉

了　椅子．

Asp.〈椅子〉

〈ふとっちょが椅子に座って壊してしまった〉

次に第二の理由として，GB 理論における格付与の条件としての‘隣接の条件’(Adjacency Condition) の違反が挙げられる．隣接の条件とは，

格を与えられている名詞句はその統率子 (Governer) に隣接していなければならない．

日本語では，この隣接の条件は必ずしも当てはまらないが，中国語に於いてはこの条件が英語と同様，一般に当てはまると考えられている．注[3)]

もし，複合動詞を独立した一語と認めず，前項動詞が独立して格を付与するとするならば，前項動詞が他動詞であっても，隣接の条件に違反してしまう．

第三に，複合動詞の否定のスコープを考えると，複合動詞を中国語では一語と見なさないわけにはいかないのである．中国語の否定詞には「不」と「没（有）」があるが，いずれも後続の動詞を否定するものである．次の否定文を考えてみよう．

(36) 我　没有　走　累．

〈私〉〈～していない〉〈歩く〉〈疲れる〉

〈私は歩き疲れていない〉

(37) 他　没　喝　醉　酒．

〈彼〉〈ない〉〈飲む〉〈酔う〉〈酒〉

〈彼は酒を飲んでも酔わなかった〉

(36)では，「走」〈歩く〉という動作を否定しているのではなく，「累」〈疲れる〉を否定しているのであり，(37)においても，「喝」〈飲む〉を否定しているのではなく，「醉」〈酔う〉を否定しているのであるから，「走累」及び「喝醉」をいずれも一つの動詞として見なさなければ中国語の否定のスコープの定義に違反するものである．

第四に，被動文を考えてみよう．

(38) 李四　被　张三　打

〈李四〉〈られる〉〈張三〉〈殴る〉

倒　了．

〈倒れる〉Asp.

〈李四は張三に殴り倒された〉

(38)において，「打倒」を一つの動詞と見なさないとこのような被動文はできない．

以上の四つの理由によってだけでも，複合動詞は一つの動詞として機能し，格付与も複合動詞全体が一つの動詞として行うことが推測される．

日本語の場合は，後項動詞が格助詞を決定するが，GB 理論の枠組みでの格付与がどのように複合動詞によって行われるかは，今後の課題となろう．日本語の場合は，以上中国語についてあげた四つの方法によって，複合動詞を一つの動詞として扱うことを必ずしも検証できないからである．

7　結語

以上，日本語と中国語の結果を示す複合動詞について考察を行ってきた．本稿で得られた結論は次のようにまとめられる．

1．日本語では，後項動詞が格助詞を決定する．従って後項動詞に動作の結果を含意する有対他動詞がくることが多い．一方，中国語では，主語・目的語に格標識がつかないので，

後項動詞にストレートに動作の結果を示す自動詞がくる．

2．中国語では，複合動詞と名詞句との意味関係が日本語とは比較にならないほど多様である．主語・目的語に格標識を持たないという中国語の統語的特徴がこうした柔軟な構造を広く許す要因と思われる．

3．θ-役割や格の付与については，日本語，中国語とも，複合動詞を一つの動詞と見なさなければGB理論の諸規則に違反してしまう．しかし，複合動詞を一つの動詞と見なし，レキシコンで個々の複合動詞の特質を記載することだけでは，複雑な意味構造を持つ複合動詞文の意味解釈が不可能である．

日本語と中国語の比較・対照研究は，中国人への日本語教育や，日本人への中国語教育に応用できる．と同時に，普遍文法と日本語・中国語との関わりを研究することも有意義である．その際に気をつけなければならないのは，英語中心に考えられてきた従来の普遍文法を重視する余り，それに反する言語現象ををすべてレキシコンや語用論に投げ込んで処理しようとすることで，このようなことをしていると，特に中国語のような，柔軟な統語構造をもつ言語に於いては，レキシコンと語用論はゴミ箱と化する恐れがある．日本語や中国語と普遍文法との関わりをさらに研究することによって本稿で挙げた問題もパラメーターを設定することによって解決できるのかもしれないが，これは今後の大きな研究課題である．(1989.9.12.)

注

1）この推測は，《他動詞》+《有対自・他動詞》の組み合わせに限っている．次のように後項動詞が無対自動詞の場合には例外もある．

豆腐やが豆腐を売り歩いている．

複合動詞全体における，格助詞の決定要素については更に総合的な研究が必要である．

2）《汉语动词－结构补语搭配词典》は，新聞，雑誌，小説，台本，映画及び日常会話から結果補語として常用される形容詞，動詞及び少数の連語を322収録してある．

3）この事は次の例文の対照によっても例証される．つまり，日本語に於いては，統率子である動詞と目的語の間に副詞の挿入が可能であるのに対して，中国語では動詞と目的語の間に副詞が挿入できない．

①a．父はゆっくり御飯を食べる．

b．父は御飯をゆっくり食べる．

②a．爸爸　慢慢地　吃　饭．

〈父〉〈ゆっくり〉〈食べる〉〈御飯〉

〈父はゆっくり御飯を食べる〉

b．＊爸爸　吃　慢慢地　饭．

〈父〉〈食べる〉〈ゆっくり〉〈御飯〉

〈父は御飯をゆっくり食べる〉

③a．彼は昨日私にある事を告げた．

b．彼は私に昨日ある事を告げた．

④a．他　昨　天　告　诉　我
〈彼〉〈昨日〉〈告げる〉〈私〉
一　件　事．
〈ある事〉
〈彼は昨日私にある事を告げた〉

b．＊他　告　诉　我　昨天
〈彼〉〈告げる〉〈私〉〈昨日〉
一　件　事．
〈ある事〉
〈彼は私に昨日ある事を告げた〉

参考文献

Chomsky, N. (1981) *Lectures on Government and Binding*. Dordrecht: Foris.

——————— (1982) *Some Concepts and Consequences of the Theory of Government and Binding*. Linguistic Inquiry Monograph Six. Cambridge, Mass.: The MIT Press.

石井正彦（1983）〈現代語複合動詞の語構造分析における一観点〉，《日本語学》第2巻8号，明治書院．

井上和子（1976）《変形文法と日本語（下）》，大修館書店，東京．

早津恵美子（1989）〈有対他動詞と無対他動詞の違いについて〉，《言語研究》第95号，日本言語学会．

黄正徳（1988）「中文的両種及物動詞和両種不及物動詞」，第二届世界華文教學研討会への提出論文（論文集は1989年に発行予定）．

呂叔湘（1986）「汉语的灵活性」，『中国语文』1986年第1期．

———（1987）「说“胜”和“敗”」，『中国语文』1987年第1期．

湯廷池（1988）「為漢語動詞試定界説」，『清華學報』第18期．

王砚农等（1987）『汉语动词一结果补语搭配词典』，北京语言学院出版社，北京．

詹人风（1989）「动结式短语的表述问题」，『中国语文』第2期．

"resultive compound verbs" in Chinese and Japanese

Keiko MOCHIZUKI

The present paper discusses 'resultive compound verbs' (henceforth, RCV) of Japanese and Chinese. One of the biggest differences between Japanese and Chinese is that Japanese has case markers on all arguments, but Chinese has no case marker on subject and object. This fact enables Chinese to have extremely flexible RCV structures which can express a great variety of meanings, while Japanese has many constraints especially on the second verb of RCV so that assignment of case markers can avoid a conflict between a case marker assigned by the first verb and another one assigned by the second verb.

We also discuss some problems which we face when analizing θ-role assignment and case marker assignment by RCV. In order to construct more practical Japanese and Chinese grammars based on linguistic reality, we suggest that establishing a new parameter of universal grammar concerned with RCV might be a better solution than stipulating properties of each RCV in the lexicon. It is hoped that discussion on theoretical problems in Japanese and Chinese within the framework of GB theory will contribute to studies on Universal Grammar.